

# 沖縄県うるま市勝連における現代版組踊『肝高の阿麻和利』

—文化資源の活用によるシビック・プライドの創出と地域再生—

今 林 直 樹

はじめに

本稿は文化資源を活用したシビック・プライドの創出とそれによる地域の再生について、沖縄県うるま市勝連における現代版組踊『肝高の阿麻和利』の取り組みを中心に考察することを主たる目的とする。

近年、地域づくり、まちづくりにおけるシビック・プライド創出の重要性が指摘されて、地方自治体による地域再生政策にも積極的に取り入れられている。それには2つの理由がある。第1に、従来の地域再生政策には地域住民の主体的な参加が希薄だったことである。第2に、従来の地域再生政策が地域経済の再生に偏重し、地域に固有の歴史や文化を有効に活用しなかったことである。そのため、地域再生政策が「地域住民不在」の政策となり、その効果も一過性のものに留まるとともに、地域住民の地域への関心が減退していく負のスパイラルへと陥っていった。

こうしたことから、地域再生のためには、地域住民自体が地域の課題に気づくとともに、課題解決に向けて主体的に関わり、地域への関心を高めていくことが不可欠であると考えられるようになった。そのために、地域やまちに対する「誇りや愛着」の意識であるシビック・プライドに注目が集まるようになったのである。すなわち、シビック・プライドの創出は地域の課題解決に主体的に関わる地域住民を生み出し、地域に根差した魅力を発見/再発見して新たな魅力を創り出し、内外に発信して持続的な地域の再生に繋げるといふ正のスパイラルを生み出すことへとつながることが期待されたのであった。

シビック・プライドを創出するために注目を集めたのが文化資源であった。文化資源には、文化財とは異なり、保護の対象となるような優れた価値を有するか否かは必ずしも重要ではなく、資源生産物を生み出すための活用可能性が重要となる。したがって、文化資源には、どのような目的のためにどのような活用が可能になるのかということが最も重要である。本稿との関わりで言えば、シビック・プライドの創出という目的のためにどのような資源がどのような活用可能性を有するかが重要になる。

文化資源は資源化の過程を経て活用可能になる。資源化の過程における出発点は資源の発見/再発見である。資源を発見することは、誰かが何かに資源となる可能性を見出すことを意味する。換言すれば資源としての可能性に気づくことである。その気づきから資源の活用目的と結びついた資源化が始まると言えよう。

以下、本稿ではシビック・プライドと文化資源について整理した後、勝連における現代

版組踊の取組みを事例に、地域における文化資源を活用したシビック・プライドの醸成について考察していく。

## 1. 理論的枠組み

### 1. シビック・プライド

日本でシビック・プライドを提唱し、体系的に整理した伊藤香織によれば、シビック・プライドは「市民が都市に対してもつ誇りや愛着」のことであり、「当事者意識に基づく自負心」である〔伊藤+紫牟田：2012：164〕。「都市」は「地域」に読み替え可能であり、「まち」に言い換え可能である。地域やまちの活性化を目的とする政策論の観点からシビック・プライドに論及した松下啓一は、それまでのブランド戦略やシティプロモーション戦略が住民の思いや共感を伴っておらず、その多くが一過性に終わってしまったと指摘し、「地域やまちの活性化は、外部から与えられるものではなく、自らが創出し、継続的に育てていくべきもの」であるという反省からシビック・プライド論が生まれてきたと述べている〔松下：2021：24〕。すなわち、伊藤の定義とあわせて、シビック・プライドの特徴は当事者性、主体性、自発性、継続性にあると言えよう。したがって、シビック・プライド政策とは地域やまちの住民の間にシビック・プライドを醸成し、彼らの主体的な参加を促して地域やまちの継続的な活性化につなげることが目的となる。

松下は、シビック・プライド政策は内発性を基本要素とするため、行政による政策手法としては行政的規制手法では機能せず、普及啓発手法や誘導支援手法が中心となると述べ、「自治体職員一人ひとりの力量が問われる」と指摘している〔松下：2021：85〕。小島桃子と片田江由佳は日本の地方行政におけるシビック・プライド政策の現状を調査し、シビック・プライドへの言及が増加している一方、目に見える事業が動き出している自治体は多くはなく、ベストプラクティスの確立には至っていないようだ述べている〔小島・片田江：2015：212〕。行政の場合、自治体職員の力量が問われるとはいえ、人事異動に伴う担当部署の配置転換があり、一貫して継続的なシビック・プライド政策に携わることは困難であるため、担当者自身が当事者意識を持ちにくいという限界がある。行政がシビック・プライドを単なる掛け声に終わらせるのではなく、実質的な成果をあげる政策とするためには、「シビック・プライドを持った自治体職員」が継続的にシビック・プライド政策に携わる組織を創設し、効果的に運営していくことが重要であると言えよう。

しかしながら、シビック・プライド政策は行政だけが担うものではなく、本来の意味からして「地域住民の主体的な参加」が最も重要な要素となることを忘れてはならない。地域住民はシビック・プライド醸成の対象ではあるが、必ずしもそのすべてではない。すでにシビック・プライドを有している地域住民もいる。彼らは地域やまちに誇りと愛着を持っており、地域やまちが抱える問題に対して当事者意識を持ち、その解決に向けて主体的に関わろうとする人びとである。彼らは行政以上に地域に対する知識を持ち、行政とは

異なる視点で地域を捉え、そこから行政とは異なる発想で対策を生み出す。シビック・プライド政策は行政と地域住民双方の協力を必要とするが、その出発点においては双方が「シビック・プライドを有していること」が重要な条件となるであろう。行政は率先して地域やまちを知り、シビック・プライドを有している地域住民の発見に努め、地域住民は積極的に行政に対して発言していくことで双方の間にコミュニケーションが成立することが必要となるのである。

なお、シビック・プライド政策の担い手は必ずしも地域やまちに居住する人びとに限定されるわけではない。外部からその地域やまちに関心を持ち、積極的に関わっていかうとする人びとも対象となる。「外部者」は「よそ者」であるがゆえに地域住民では見落としがちな魅力を発見できるとともに、地域や地域住民と一体化して当事者意識をもって主体的に地域づくり、まちづくりに参加するのである<sup>1</sup>。

では、シビック・プライドを醸成するための具体的な政策とはどのようなものであろうか。そもそも、シビック・プライド論は建築学分野から提唱されたものであり、地域やまちをデザインすることが重要な柱であった<sup>2</sup>。それは地域やまちの魅力となるような伝統的景観の保存や再生、地域やまちの歴史や文化に根差した新しい景観の創出である。シビック・プライドについて日本における研究動向を整理した牧瀬稔は、シビック・プライドの特徴を「見える」ことにあると述べている〔牧瀬：2019：24〕。デザインとして可視化された地域やまちの魅力が地域住民の間にシビック・プライドを醸成する、すなわち地域やまちに対する誇りや愛着を醸成していくことが期待されるのである。

地域やまちに固有の歴史や文化を掘り起こすことも重要である。それらは、後述するとおり、地域やまちにおける文化資源となる。そうした文化資源を活用したシビック・プライドの醸成を模索していくことが必要である。それは、前述のように、魅力ある景観の創出につながるだけではない。文化政策学の構築と体系化を進めてきた根木昭が「文化の態様」を「芸術文化、生活文化、国民娯楽」、さらに「環境文化、生活文化、芸術文化」に分類しているように〔根木・佐藤：2016：17-18：225-229〕、それぞれの態様に合わせた地域やまちの魅力創出につなげていくことができるのである。そこには、地域の祭祀儀礼や口頭伝承、演劇や歌謡などの舞台芸術、美術や工芸などが対象として含まれるであろう。

シビック・プライド政策は「シビック・プライドを有している」自治体職員や地域住民、あるいは地域やまちに関心のある人びとからスタートする。しかし、シビック・プライドの共有は一部の人びとの間に留まっていはいけない。可能な限り多くの人びとに共有されなければならないが、それは一朝一夕でできることではない。そのため、いくつかの段階を経て実現へと至ることが考えられる。それは、第1段階：シビック・プライドを有している人びとによるシビック・プライド政策の立案と実施、第2段階：シビック・プライドの水平的拡大、第3段階：シビック・プライドの垂直的深化、第4段階：シビッ

ク・プライドの持続的発展である。

第1段階はこれまで述べてきた段階である。第2段階と第3段階は地域住民から政策に対する共感を得る段階である<sup>3</sup>。水平的拡大は地域やまちのより広い範囲に共感が広がっていくことを意味し、垂直的深化はある特定の世代やカテゴリーを超えて共感が広がっていくことを意味する。厳密には両者はいずれかが先行するわけではなく、同時並行的に進んでいくと考えられる。第4段階は共感を得て醸成されたシビック・プライドを持続可能なものとする段階である。文化や芸術を活かしたシビック・プライド政策であるならば、その継続に必要な人員の確保と組織化、施設・設備の整備、実施に向けた予算の確保などが考えられるであろうし、景観保存の場合には維持・管理を適切に行っていくためのシステムの確立が求められることになるであろう。学校教育や社会教育を通じたシビック・プライドの継承も重要であろう。

以上、シビック・プライドについて整理してきた。次節では、シビック・プライドとともに本稿における重要な鍵概念である文化資源について整理していく。

## 2. 文化資源

文化資源は比較的新しく提唱された概念であり、近年、地域政策学や文化政策学などの学問領域で本格的に用いられている。2002年に設立された文化資源学会の設立趣意書によれば、文化資源とは「ある時代の社会と文化を知るための手がかりとなる貴重な資料の総体」（文化資料体）であり、博物館や資料館に収めきれない建物や都市の景観、あるいは伝統的な芸能や祭礼など、有形無形のもの<sup>4</sup>が含まれる。同趣意書によれば、学会の目的は「さまざまな形で流通し、埋蔵され、あるいは消失の危機に瀕している資料を発掘し、考証と評価、整理と保存、公開と利用といった諸段階を総合して、文化資源の形成・発達をリードする研究を推進すること」である。ここに記された発掘から公開・利用へと至る諸段階は「資源化」の過程であると考えることができる。

文化資源は文化財とは異なり、それ自体が持つ価値の高低とは必ずしも関係はない。この点で、文化資源学会初代会長を務めた木下直之の「資源ゴミ」の比喩は興味深い〔木下：2017：62〕。一般的に「ゴミ」とは日常生活で発生する役に立たない不用物で、廃棄の対象となるものである。反対に、「資源」は日常生活の役に立つ有用物で、保存の対象となる。まったく相反する言葉が一つになったものが「資源ゴミ」である。「ゴミ」は資源としてその価値を認められた瞬間に「ゴミ」ではなくなる。すなわち、「資源ゴミ」は「資源」となる。木下は「ゴミとはすぐれて価値判断の問題」だと述べている。

この比喩から明らかなように、何にどのような資源としての価値を見るかは人に依存する。人がその「もの」に資源としての活用可能性を見出した時、その「もの」は潜在的に資源となるということができよう。その意味で、資源化の過程は「もの」の活用可能性の明示化であり、潜在的価値の顕在化である。

文化政策・文化行政の研究者である小林真理は、「さまざまな地方自治体に関わるなかで、各地域に存在しながらも発見されていない資源や雰囲気存在に気づいた」という [小林：2020：270]。それは「地域の人たちにとってはあまりに当たり前すぎて意識されないようなものであり、『文化』とも見なされていない」「もの」であった [小林：2020：271]。地域の人びとはその「もの」を不用と考えているわけではないので「ゴミ」ではないのだが、同時に「資源」とも見なされていないことがわかる。小林は、「そうであるからこそ、地域の文化振興の方針や計画を作成するためにはこれらの存在を浮かび上がらせ明らかにすることが不可欠である」と述べている [小林：2020：271]。その意味で、資源化の過程において重要なのは第1段階としての資源の発掘、筆者の理解で換言すれば資源の発見/再発見である。

小林は、地域文化振興のための鍵となるのは住民、「地域の住民であるという意識が高い人」の力であると述べている [小林：2020：272]。本稿のテーマに引き付けて換言すれば、すなわち「シビック・プライドを持った地域住民」ということになるであろう。前節で、シビック・プライド政策の主体として「よそ者」が重要であることを確認した。この点は、先の小林のエピソードからも明らかなように、文化資源の発掘、発見/再発見にも妥当性を持つであろう。すなわち、「よそ者」だからこそ地域住民が気づかない資源としての価値に気づくことができるのである。

資源化の過程は資源としての活用可能性を探る過程であり、その点で「考証・評価」の段階は活用の可否に関わる重要な段階であるということが出来る。なぜなら、考証と評価において判断が分かれることがあるからである。考証の結果、活用可能性について高い評価が得られれば活用に向けて整理・保存、そして公開・利用へと進んでいくことになるが、低い評価しか得られないのであれば活用を断念せざるをえなくなる。しかし、場合によっては、高低あるいは善悪いずれの評価も持っていることがある。その場合は、活用目的に沿った高低・善悪いずれかの選択をすることになるであろう。それは御都合主義に墮してはいけないが、「低・悪」とされたものを「高・善」へと価値転換を図ることが、政策目的上、不可欠であると判断される場合などでは必要な選択であると言えるであろう。

最後に、「文化資源」が意味する範囲について触れておきたい。文化政策研究者の伊藤裕夫は、「特定の社会において文化を再生産していく文化的環境システム」を広義の文化資源として提唱している [伊藤：2008：55-57]。伊藤は、祭りや伝統芸能を例に挙げ、それ自体が文化資源（狭義）であるが、「制度化された人的・組織的ネットワーク」など、祭りや伝統芸能を「習得・共有・継承」してきた何らかの環境システムもまた文化資源として機能していると説明している。広義の文化資源を検討することで、個々の文化資源が個別に存在しているのではなく、そのいくつかが相互に関連し合って展開しているという地域の文化資源の全体的な構造も見えてくると述べている。たしかに、文化的生産物を支える環境システムが機能しなくなることは文化的生産物そのものが継続的に生み出される

ことを不可能にするだけでなく、持続的な活用可能性を失うことにもつながる。この点は資源化の過程における「保存・整理」に関わる。すなわち、環境システムの維持を含めた文化資源の「保存」という視点が不可欠なのである。

今林直樹は、沖縄の「やちむん」を事例に、構成資源という点から文化資源について論じている〔今林：2023：18〕。「やちむん」とは「焼物」を意味する言葉であり、具体的には皿や茶碗、湯呑などの生産物を指す。しかし、生産物だけを文化資源と見るならば、作り手としての陶工をはじめ、陶土や釉薬などの原材料、窯の種類といった焼成方法などが見落とされてしまうことになりかねない。文化的生産物を生み出す要素のそれぞれを構成資源とみることで、ある文化資源を複合資源として捉えることができる。伊藤のいう環境システムとは異なるが、それら構成資源のいずれかでも維持することができなければ文化的生産物それ自体が失われるという点では共通していると言えるであろう。

以上、文化資源について整理してきた。次節以下では、文化資源を活用したシビック・プライドの醸成による地域再生について、沖縄県うるま市勝連における現代版組踊の取組みを事例に考察していく。

## II. 事例研究—沖縄県うるま市勝連—

### 1. 歴史の中の勝連

#### (1) なぜ勝連なのか

本稿で取り上げる沖縄県うるま市勝連という地域は、文化資源を活用したシビック・プライドの醸成とそれによる地域の再生に取り組んだ成功事例である。その成功の要因を考察することは、同様の課題を抱えている地方自治体の再生あるいは創生に向けて有効なヒントになり得ると考える。それが本稿で勝連を取り上げる理由である。

勝連は沖縄本島中部東岸にある勝連半島（通称は与勝半島）の西南に位置する地域である。行政区分としては1908年4月に勝連村、1980年4月からは勝連町となり、2005年4月に具志川市、石川市、与那城町と合併し、うるま市勝連となって現在に至っている。

本稿で取り上げる沖縄県うるま市勝連という地域は、琉球王国史上、「第一の逆臣」〔伊波：2017：124〕と言われる阿麻和利が治めた地であり、歴史的に「負の記憶」を背負った地域であった。それは地域住民の中に地域への無関心とシビック・プライドの欠如を生んでいた。外部から同地域への蔑視もある中、自己否定とも言うべき負の意識を自己肯定という正の意識に転換することが、勝連という地域にとって克服しなければならない重要な課題であったのである。

課題解決のために不可欠なことは阿麻和利像の転換であった。そのために再発見された文化資源が『おもろさうし』や地域の口頭伝承に残された阿麻和利であり、世界文化遺産に認定された勝連城であった。それらは阿麻和利に関する「正の記憶」を伝えるものであった。阿麻和利の「正の記憶」を文化資源として活用し、「負の記憶」を超克しようと

試みたのが現代版組踊であった。それは勝連の「負の記憶」を払拭し、地域住民にシビック・プライドを醸成する大きな転換点となったのである。

以下、本節では歴史の中に表れた勝連の「正の記憶」と「負の記憶」を整理することから始めたい。

## (2) 正の記憶

琉球王国時代の勝連が歴史の中で正の価値を有する存在として記憶されるのは主として2点の文化資源による。第1に、『おもろさうし』であり、第2に、勝連城址からの発掘品である。

『おもろさうし』は全22巻1554首から成る歌謡集である。第1巻が当時の中国の明の元号で嘉靖10(1531)年の編纂、第2巻が万暦41(1613)年、第3巻以降は天啓3(1623)年の編纂である。収録されたオモロから、当時、琉球王国を構成していた地域の政治や経済、あるいは社会や文化を読み取ることができる。その意味で、『おもろさうし』は貴重な文化資源であると言える。

その第16巻が「勝連具志川おもろ御さうし」である<sup>5</sup>。同巻には勝連をはじめ、平安座や伊計、宮城など周辺離島が取り上げられている。本稿との関連で言えば、勝連の正の記憶を謡ったオモロは「巻16-1133」「巻16-1144」「巻16-1147」「巻16-1163」(以上、「勝連を讃えるオモロ」)、「巻16-1128」「巻16-1129」「巻16-1134」「巻16-1141」(以上、「阿麻和利を讃えるオモロ」)である。

「勝連を讃えるオモロ」が伝える勝連は、大和の鎌倉にも譬えられるほどに繁栄した地域であり(「巻16-1144」)、太陽に向かって門を開き、真玉や黄金が寄り集まる地域であった(「巻16-1133」)。また、「阿麻和利を讃えるオモロ」が伝える第10代勝連按司の阿麻和利は、勝連の民から「千年も治めよ」と謡われるほどに優れた良主であり(「巻16-1129」)、その名が国中に鳴り轟くほどの人物であった(「巻16-1141」)。オモロで阿麻和利は「肝高」と形容される。「肝高」は「心根が高い。心が高く優れていること」を意味する[名桜大学『琉球文学大系』編集刊行委員会：2023：421]。伊波普猷はこれらのオモロから繁栄を謳歌した勝連の民は阿麻和利の統治に「如何ばかり満足していたろう」と記し、「小児の慈母を慕うが如く」に阿麻和利を慕っていたと記している[伊波：2017：135]。

このように、巻16のオモロが伝える勝連は、阿麻和利という優れた統治者を得て政治的に安定するとともに、経済的にも繁栄した地域であった。

勝連の経済的繁栄を裏付ける物的証拠が勝連城からの出土品である。勝連城からは開元通宝や天聖元宝、大観通宝、洪武通宝といった中国の銅銭が発掘されているが、白井克也によれば、多数出土しているのが14世紀の洪武通宝であり、「最盛期の勝連城で貿易が盛んであったことをうかがわせる」と推測している[白井a：2022：92]。さらに、2016年9月、勝連城から3~4世紀頃の古代ローマの貨幣とオスマン帝国のスレイマン2世時代の貨幣が発見されているが、これらは勝連以外からは発見されていない。白井は、それら

が「イスラーム商人やヨーロッパ商人などの国際的な交易によってもたらされたのであろう」と推測するとともに、勝連城からは17世紀以降も寛永通宝が多数出土するなど、「廃城後も重要な拠点としての価値を失わなかった」と記している〔白井b：2022：92〕。

このように、琉球王国時代の勝連はその地の利を活かして、国内外の諸地域と幅広く交易を行い、経済的繁栄を謳歌した地域であったのである。

### (3) 負の記憶

他方で、勝連は「負の記憶」を有する地域でもあった。それは第1に、琉球王国の正史に記述された勝連の記憶であり、第2に、踊奉行であった玉城朝薫が創作した組踊『二童敵討』で刻まれた勝連の記憶であった。その記憶はいずれも阿麻和利に関するものである。

琉球王国の正史としては『中山世鑑』『中山世譜』『球陽』があるが、阿麻和利が琉球王府に対する逆臣として描かれるのは『中山世譜』による。同書の巻5の明の天順二年の項に、時の第二尚氏王統第6代尚泰久王が大城（夏居数）を派遣して阿麻和利を征討したことが記されている〔伊波・東恩納・横山編著：1962：70-71〕。この記事を踏襲したのが『球陽』である。そこに記された阿麻和利は武芸が人に優れていたが、その性格は驕傲で諸按司を草芥と見ており、常に弑篡の野心があったとされる人物であった〔球陽研究会編：1974：127〕。

『中山世譜』は、阿麻和利は自身の野望を果たすために謀略を用いて、尚泰久王の家臣でその義父でもあった護佐丸を討ち、王府に対して謀叛を起こしたと記している。1458年に勃発したいわゆる「護佐丸・阿麻和利の乱」がそれである。『中山世譜』は護佐丸を「忠臣」とし、阿麻和利を「逆賊」とした。これが『球陽』にも引き継がれ、「阿麻和利逆臣説」が定説として固定化することとなったのである。

そして、護佐丸の遺児が阿麻和利を討つという筋書きの組踊を創作したのが玉城朝薫であった。すなわち、『二童敵討』がそれである<sup>6</sup>。朝薫が『二童敵討』を上演したのは1719年のことである。組踊は琉球国王の代替りに中国皇帝から派遣される冊封使を歓待するために創作されたものである。朝薫は踊奉行として、1713年に即位した琉球王国第二尚氏王統第13代尚敬王の冊封に際して組踊を創作した。朝薫は『二童敵討』をはじめ、『執心鐘入』『銘荀子』『孝行之巻』『女物狂』の五番を創作して、「劇聖」と称されることになる<sup>7</sup>。

朝薫は『二童敵討』の冒頭で阿麻和利（作中ではアマオヘ）に「首里グスクを滅ぼせば、この天の下は思い通りに遊んで、この世を暮らそう。邪魔者であった護佐丸も殺して、その生みの子を刈り捨てて、その愛児を刈り捨てて気掛かりなことはない。道の障害もない。吉き日を選び、勝る日を選んで、首里の戦いをしよう」と語らせている。（〔名桜大学『琉球文学大系』編集刊行委員会編纂2022：327〕）蔡鐸本『中山世譜』の編纂が1701年であることを考えれば、朝薫が『二童敵討』の中で描いたアマオヘは『中山世譜』



の記述を踏まえてのことであったであろう。『二童敵討』は「逆臣阿麻和利」のイメージを定着させる決定的要因となったのである。

## 2. 現代版組踊という試み

### (1) 阿麻和利の再評価と限界

勝連は歴史の中で「正の記憶」と「負の記憶」が相克する地域であった。そして、それは阿麻和利の記憶をめぐる相克であった。阿麻和利の評価については、琉球王国の正史類と組踊『二童敵討』が描く負の阿麻和利像が定説化していった。しかし、こうした阿麻和利のイメージに対して再評価しようとする動きが、主として歴史学の分野で起こってきた。

最初に阿麻和利の再評価に一石を投じたのが田島利三郎であった。田島は1898年に発表した「阿摩和利加那といへる名義」<sup>8</sup>において、『おもろさうし』に謡われた阿麻和利をその実像とし、阿麻和利という名が「天人降臨」を意味する「アマリ」に由来し、「アマオリ」「アマワリ」「アマリ」が同義であると論じ、阿麻和利について「非常に人民に信ぜられしと断言するも強ち臆断にはあらず」「(阿麻和利は) 琉球の豪傑たるを失はず」と主張した〔伊波編：1924：1-5〕。

この田島の説を受けて、さらに詳細に阿麻和利の「真相」を論じたのが、1905年に発表され、1942年に改稿された、伊波普猷の「阿麻和利考」であった〔伊波：2017：124-143〕。伊波は、田島と同じく『おもろさうし』を主たる史料として用い、勝連の民が阿麻和利を優れた統治者として見、誇りとしていたことを論証したのである。但し、伊波は同論考の冒頭で「これによって沖縄第一の忠臣護佐丸公の倫理的価値を否定しようとするものではない」と断っており、いかに「沖縄学の父」と言われた伊波であっても、当時はまだ定説を覆すまでに機が熟しておらず、定説に配慮しながら慎重な記述を進めなければならなかったことがうかがわれるが、伊波はこの論考において、阿麻和利の真相は定説に言われるような「沖縄第一の逆臣」ではなく、乱世から治世へと移り変わる時代に生まれた「沖縄最後の古英雄」であると結論づけたのである。

この伊波の「阿麻和利考」の初発表から80年近く経った1982年、「勝連按司阿摩和利の名誉のために」と題する論考を発表したのが川平朝申である。川平はその冒頭で、阿麻和利が歴史の敗者として一方的に「逆賊無道の徒『屋良のアマンジャンナー』の汚名を負わされたまま今日に語り伝えられて来た」と記し、阿麻和利の名誉のために「逆賊ではなかった」と論ずるためにペンを執ったと書いている〔川平：1982：49〕。論旨は田島や伊波と同様である。川平は最後に「きもたかのあまわりを、かつれんのあまわりを、正しく証する日が来るであろう」と記してペンを置いている。

川平の論考からは、田島と伊波の論考から80年以上の時を経てなお「阿麻和利逆臣説」が根強く残っていることがわかる。では、なぜこれほどまでに「阿麻和利逆臣説」は

強固に残り続けているのであろうか。この点について、「あまわり浪漫の会」会長の長谷川清博氏は「玉城朝薫の『二童敵討』の影響が圧倒的に大きい」と語る<sup>9</sup>。

朝薫の『二童敵討』は『おもろさうし』や琉球王国の正史類と決定的に異なる。なぜなら、組踊は沖縄が琉球王国の終焉と沖縄県としての日本への統合へと変遷していく中で、冊封使歓待という性格から脱して、一般の人びとに向けて上演されるようになったからである。『おもろさうし』は解釈することも難解な歌謡であるとされ、正史類は漢文で記されていたこともあって一般庶民には近づき難いものであった。しかし、組踊は伝統芸能であり、舞台芸能であった。組踊は琉球舞踊や琉球古典音楽を基礎にしたもので、台詞が琉球語であったこともあって、一般庶民の鑑賞にも十分耐えるものであった。

このため、『二童敵討』は舞台を通して、逆臣としての阿麻和利像を視覚的にも具体的に示す役割を果たしただけでなく、それが今日に到るまで上演され続けることによって、阿麻和利に付着した「負の記憶」が、宮廷という閉じた空間から一般庶民に開かれた社会へと水平的に拡大するとともに、世代を超えて垂直的に深化して継承されるという決定的な効果をもたらしたのである。作家の嶋津与志によれば、『二童敵討』は学校などでも盛んに上演されており、阿麻和利の悪人面した人物像は子どもたちの脳裏にも焼きつけられて、教員たちもどうやって阿麻和利と勝連の歴史を語ればよいのか困惑しているという[嶋：2011：34-35]。

したがって、「阿麻和利逆臣説」という「負の記憶」を覆し、『おもろさうし』に謡われた「正の記憶」を持つ阿麻和利像へと転換するためには学問的な研究を積み重ねるだけでは限界があった。一般の人びとにとって親しみやすく、わかりやすい形式で、より広く、より持続的に発信していくことが不可欠であった。換言すれば、それは朝薫の組踊に匹敵する、あるいはそれを乗り越えるものでなければならなかった。そして、そのために考案されたものが「現代版組踊 肝高の阿麻和利」（以下、「肝高の阿麻和利」）であった。その成功は、勝連地域の人びとにシビック・プライドを醸成し、地域の再生へと導いていくことになる。

## (2) 上江洲安吉

「肝高の阿麻和利」の発起人は上江洲安吉であった。上江洲が「肝高の阿麻和利」構想を提案した時、上江洲は勝連町教育委員会の教育長の職にあった<sup>10</sup>。1928年に勝連の南風原に生まれた上江洲は、1945年以降、小・中学校の教員を務め、小学校の校長を経て、1994年から2005年まで勝連町の教育長に就任する。

上江洲は教育長として3点の課題に取り組んだ。第1に、中学校教育の改善である。上江洲によれば、当時、勝連の「子どもを取り巻く環境は、情報化や国際化など急速に変化していく社会情勢が続く、深夜徘徊、交通事故・事件、不登校生徒が多発する傾向にあった」という[上江洲：2011：38]。上江洲は中学校時代に基本的な人生観が育てられるとの考えから、地域文化活動を通して期待する人間像の形成を目指してほしいと考えたのであった。

第2に、阿麻和利の名誉回復である。東門弘によれば、1992年の秋に勝連町の町民憲章制定委員会が発足した時に委員長に選出されたのが上江洲であった〔東門：2011：42〕。上江洲は、町民憲章は『おもろさうし』で讃えられた阿麻和利を堂々と礼讃できるものにしたいとの思いを含めようとしたという。また、上江洲は「きむたか」の名称にも強いこだわりを示した。「肝高」は「心が高く優れていること」を形容する言葉であった。上江洲は阿麻和利の逆賊汚名返上に努力してほしいとの旨を申し添えて、吉野勇吉町長（当時）に提出したという。上江洲にとって、阿麻和利の名誉回復は教育長として成し遂げなければならない課題であった。

第3に、勝連の再生である。このことは「中学校教育の改善」「阿麻和利の名誉回復」の延長線上にくる課題であった。「肝高の阿麻和利」で脚本を務めた嶋津与志によると、阿麻和利の名誉回復には「昔は勝連出身と名乗っただけで『逆賊アマンジャラー（悪者）の子孫』と差別された」「子どもたちにあのような屈辱的な思いはさせたくない」との教育者としての上江洲の強い決意が感じられたという〔嶋：2011：35〕。すなわち、勝連を誇るべき地域に転換、再生することが上江洲の強い願いであったのである。

以上の課題を解決するために上江洲が構想したものが「現代版組踊 肝高の阿麻和利」であった。「肝高の阿麻和利」に向けて上江洲が提示した条件は、次の6か条であった。すなわち、①阿麻和利の名誉回復、②『二童敵討』に対抗する組踊の創作、③出演者は町立中学校の生徒にかぎること、④劇中に町内の伝統芸能をすべて織り込むこと、⑤世界遺産登録を記念して勝連城内で野外公演を行うこと、⑥世界遺産発表の来年3月までに上演すること、である〔嶋：2011：34-35〕。現代版組踊のタイトルを「肝高の阿麻和利」としたのも、上江洲の強いこだわりであったであろう。脚本を担当した嶋によれば、上江洲が「組踊」という方法にこだわったのは、単に玉城朝薫の『二童敵討』に対抗するというだけでなく、上江洲自身が琉球古典芸能に造詣が深かったからだと記している〔嶋：2011：34-35〕。

### (3) 「肝高の阿麻和利」

「肝高の阿麻和利」は脚本に嶋津与志、演出に平田大一を迎えて、スタートした。「肝高の阿麻和利」に関する主体は次の4つである。第1に、教育長をはじめとする教育委員会の職員である（行政）。第2に、与勝地区の4つの中学校の校長を含めた教職員である。第3に、参加中学生の保護者である。第4に、「肝高の阿麻和利」に参加する中学生である。

「肝高の阿麻和利」が動き始めた当初、上記4つの主体はいずれもその実現には懐疑的、否定的であった<sup>11</sup>。教育長を除く教育委員会の職員は、与勝の子どもたちは「田舎者」で、古典劇様式の組踊は無理だと考えていた。学校側は活動が放課後であるということから関わろうとはしなかった。保護者は子どもの負担と送迎に携わる保護者の負担を理由に反対の声を上げた。上江洲と平田は与勝地区の4つの中学校（与勝中・与勝第二中・

津堅中・浜中)を回って生徒たちに参加を呼び掛けたが、初回の稽古日に参加した生徒はわずかに7名であった。

しかし、初稽古から3か月後、「肝高の阿麻和利」への参加中学生は150名に増えていた。そこには主として4つの要因があった。第1に、演出を担当した平田の努力である。平田は町のマイクロバスを借りて自ら参加生徒を送迎し、稽古の最後には「一芸コーナー」で三線や太鼓、歌、朗読、ものまねを毎回ひとつずつ披露して盛り上げて、「次に来的时候には友達を一人連れてくるように」と呼びかけ続けたのである〔あまわり浪漫の会：2010：3〕。

第2に、教育委員会の職員の協力体制が整ったことである。当時、教育委員会の文化課長であった田原真孝によれば、当初、この企画を「無謀過ぎるのではないか」と思っていたが、実現のためには課内全職員の協力体制のもとに取り組みねば進まないため、昼夜を問わずに取り組み、気づく課題をどんどん取り上げていったという〔田原：2011：52-53〕。上江洲は稽古日には教育委員会の厨房が荷物置き場となり、女子職員が「おにぎりと飲み物」を用意したと記している〔上江洲：2011：51〕。また、田原は、人数が増えてくるとマイクロバス1台では不十分となり、他課の公用車も借り上げて、勤務時間外であっても送迎したと記している〔田原：2011：53〕。

第3に、保護者の理解が得られたことである。上江洲は教育委員会が運転手に助手一人を付け、子どもたちを自宅まで送り、家族の出迎えを受けて帰宅するという安全面を重視した取り組みを行ったことが父母や地域の理解につながったと記している〔上江洲：2011：51〕。

第4に、参加生徒にとって「肝高の阿麻和利」が彼らの居場所となっていったことである。最初は内容も分からず誘われて参加した生徒が「いつの間にか平田ワールドに巻き込まれて」いき、練習を通じて形成された所属学校の枠を越えた人間関係が築かれ、やがては不登校の生徒も参加して彼らの居場所になっていったのであった<sup>12</sup>。

こうして、2000年3月、「肝高の阿麻和利」は初公演を迎えた。勝連城址で行われた2日間の公演は計4200人の観客を集め、大成功に終わったのである。

#### (4) 「肝高の阿麻和利」がもたらしたもの

本稿では「肝高の阿麻和利」がもたらしたものとして4点を指摘しておきたい。

第1に、阿麻和利の名誉回復である。上江洲が提示した条件を受けて、脚本を担当した嶋は6つの場面を創作した。その前半は『おもしろさうし』や口頭伝承に語られる阿麻和利の「正の記憶」によるものであった。「護佐丸・阿麻和利の乱」については、背景に金丸(第二尚氏王統初代国王尚円)の策略があり、阿麻和利は護佐丸を討ち、王府の企てと知りつつ平和を願って敗北を受け入れるという結末になっている<sup>13</sup>。

第2に、勝連と勝連に生きる人びとの間にあった「負の意識」を「正の意識」に転換したことである。「肝高の阿麻和利」は、一部に方言を盛り込みながらも現代日本語をベー

スにした舞台劇であった。そのため観客はストーリーの理解に困難が伴うことはなく、阿麻和利を勝連の「誇るべき歴史的偉人」として理解したのである。参加生徒からは「肝高の阿麻和利」を通して勝連の歴史を知ることができ、勝連に対して誇りと自信、愛着を持つようになったという声も上がっている<sup>14</sup>。「肝高の阿麻和利」の上演は勝連に「正の意識」を持つ人びとを育て、勝連が歴史的に持っていた負のイメージを払拭することになったのである。

第3に、「肝高の阿麻和利」の成功が勝連の人びとの自発的で持続的な活動へと広がっていったことである。当初は「肝高の阿麻和利」に否定的であった保護者は公演の成功を受けて、同年8月には「父母会」を結成し、同会はその翌年には「あまわり浪漫の会」となって「肝高の阿麻和利」の支援団体となった<sup>15</sup>。また、参加した生徒の中には卒業後も「肝高の阿麻和利」の活動に携わり続けている人もいる。ここに「肝高の阿麻和利」の活動は世代を超えた深化を見せ、組織的に継続していく基盤を作っていったのである。

第4に、「肝高の阿麻和利」の勝連を越えた広がりである。「肝高の阿麻和利」は2001年11月には勝連を越えて読谷村で初の出張公演を行い、2003年8月には沖縄県を越えて関東で初の県外公演を行い、2008年11月には日本を越えてハワイで初の海外公演を行って、いずれも成功を収めている<sup>16</sup>。こうした活動の広がりには、「肝高の阿麻和利」を成功事例として、県内外において勝連と同様の課題を抱えていた他の地域が、「現代版組踊」という方法を取り入れることによって、地域の再生を含めた課題の解決を模索する動きを創出していくことになったのである<sup>17</sup>。

## おわりに

以上、本稿は沖縄県うるま市勝連における現代版組踊「肝高の阿麻和利」の取組みを中心に文化資源を活用したシビック・プライドの創出とそれによる地域の再生について考察を進めてきた。本稿のテーマについて明らかにしたことを以下にまとめておく。

第1に、地域でシビック・プライドを醸成するには「すでにシビック・プライドを持った人物や組織」の存在が重要であるということである。本稿で取り上げた上江洲安吉がそれにあたる。上江洲は勝連の歴史や文化に関して造詣が深く、勝連が抱えている課題についても理解するだけでなく、その解決に向けて行動する意思を有していた。上江洲が教育委員会の教育長を務めていたことも重要である。なぜなら、シビック・プライドの醸成に行政が主体的に関わることでできたからである。

第2に、地域におけるシビック・プライドの醸成には地域に固有の文化資源を活用することが有効であるということである。シビック・プライドは地域に固有の歴史や文化に関係しないものから醸成されるのではない。地域に固有の、文化財という枠に留まらない、より広い意味での文化資源を発掘し、評価して、目的に沿って有効に活用していくという丁寧な過程を経ることによって醸成される。本稿における阿麻和利の再発見と再評価、現

代版組踊としての活用はその事例である。地域に固有の文化資源を活用するからこそ、その延長線上に地域住民と密接に結びついた地域の再生が実現していくことになるのである。

第3に、シビック・プライドが醸成されたら、その持続性を確保するための自発的な活動が展開するということである。本稿における「あまわり浪漫の会」の設立がその事例である。初演終了後、参加生徒から再演要望書が教育委員会に提出された。以後、「肝高の阿麻和利」は、2023年11月現在、総公演回数が県内外、国内外を合わせて350回を超え、総入場者数も20万人を超えている。上江洲の構想が一過性のものに留まることなく、初演から20年以上にわたって活動が継続しているのは参加生徒たちの強い思いと「あまわり浪漫の会」の存在が大きいからである。

地域におけるシビック・プライドの醸成は、地域の再生あるいは創生という点から今後ますます重要性を増していくと考えられる。本稿はその実現のために沖縄県うるま市勝連の成功事例を取り上げたが、さらに事例研究を積み重ねることによって、理論的にも精緻化するとともに、実践としても適応可能性を広げることによって貢献していきたい。

#### 註

- 1 [敷田 2009: 86-89] は「よそ者効果」として①技術や知識の地域への移入、②地域の持つ創造性の惹起や励起、③地域の持つ知識の表出支援、④地域（や組織）の変容の促進、⑤しがらみのない立場からの問題解決の5点に整理している。
- 2 [伊藤: 2012: 169-171] は、都市計画におけるヴィジョンの道具立てとなるのがコミュニケーションであるとし、それとの関わりで「デザインすべきは、シビックプライドの形ではなく、シビックプライドを醸成するためのコミュニケーション」とであると記している。
- 3 まちづくりや観光に関する「共感」については、[井口貢編著: 2007]を参照。
- 4 「設立趣意書」については、文化資源学会 HP で公開されているものを参考にした。URL は次のとおりである。<http://www.1.u-tokyo.ac.jp/CR/acr/overview/shuisho.html> (2023年6月23日閲覧)。
- 5 本稿では [名桜大学『琉球文学大系』編集刊行委員会編纂: 2023] に収録されているオモロを参照した。
- 6 本稿では [名桜大学『琉球文学大系』編集刊行委員会編纂: 2022] に収録されているものを参照にした。なお、収録されている演目名は『護佐丸敵討』である。
- 7 文学研究の立場から玉城朝薫の組踊を考察したものとして [犬飼: 2004] を参照。なお、[犬飼: 2004: 223-248] は、玉城朝薫を「どこまでも人間をとらえその内面をみつめようとした」作家であるとし、朝薫は『中山世譜』の中の阿麻和利だけではなく、『おもろさうし』の中の阿麻和利についても知っていて、それらを踏まえて朝薫自身の「アマオヘ」像を造形したと解釈している。
- 8 「あまわり」の漢字表記については「阿麻和利」と「阿摩和利」の2種がある。本稿では書名、論題等に用いられている場合はその表記を尊重するが、それ以外の本文中では「阿麻和利」を用いる。
- 9 筆者は、2023年8月26日、「あまわりパーク」にて「あまわり浪漫の会」会長の長谷川清博

- 氏にインタビューを行った。長谷川氏からは貴重なお話を伺うとともに、[あまわり浪漫の会：2010]を御恵贈いただいた。ここに記して感謝申し上げる。
- 10 上江洲安吉については、[あまわり浪漫の会：2010][上江洲安吉+『きむたかの翼』編集委員会：2011]に詳しく紹介されている。
  - 11 この点について、上江洲は(現代版組踊の取組みが)「学校、父母、地域にいまだに理解されていない面がある」と苦労の様子を語っている([上江洲安吉+『きむたかの翼』編集委員会：2011：48-50]。また、平田大一も[平田・平田・本橋：2002：48-50]で学校や父母への説得に苦労したことを語っている。
  - 12 この点については、「歴代『阿麻和利』メンバー座談会」[あまわり浪漫の会：2010：20-23]および「『あまわり』卒業生座談会」[上江洲安吉+『きむたかの翼』編集委員会：2011：126-135]を参照。
  - 13 護佐丸・阿麻和利の乱と金丸との関わりについては、[伊波：2017：142]が「この時首里城に在って、高所で阿麻和利の活劇を見物して、微笑を洩らした四十の坂を三つ越した官吏があった。この人こそは天が乱後の沖縄を整理すべく遣った唯一の経世家である。阿麻和利の活劇は畢竟するにこの伊平屋王(尚家の元祖)のドラマの序幕たるに過ぎない」と書いている。すなわち、この人物は金丸のことである。
  - 14 この点については、「卒業生の声」[上江洲安吉+『きむたかの翼』編集委員会：2011：126-135]を参照。
  - 15 「あまわり浪漫の会」については、「現代版組踊『肝高の阿麻和利』公式ホームページ(<https://www.amawari.com>)を参照。
  - 16 「肝高の阿麻和利」の活動の歩みについては、[あまわり浪漫の会：2010：8-11]を参照。また、その詳細については[上江洲安吉+『きむたかの翼』編集委員会：2011：66-88]を参照。
  - 17 現代版組踊の県内への広がりについては[あまわり浪漫の会：2010：14]を参照。なお、県外を含めた広がりについては「現代版組踊推進協議会」の公式ホームページ(<https://www.gendaibankumiodori.com>)を参照。

## 参考文献

- あまわり浪漫の会 [2010] 『現代版組踊「肝高の阿麻和利」をより深く知るためのガイドブック『キムタカ』の力』 あまわり浪漫の会
- 有賀沙織 [2013] 「郷土文化の舞台化—愛知県西尾市での一市三町合併記念公演『吉良きらきら』の製作」『文化資源学』11 文化資源学会
- 井口貢 [2007] 『まちづくり・観光と地域文化の創造』学文社
- 井口貢編 [2015] 『観光学事始め 「脱観光的」観光のススメ』法律文化社
- 井口貢編著 [2007] 『まちづくりと共感、協育としての観光 地域に学ぶ文化政策』水曜社
- [2008] 『入門 文化政策—地域の文化を創るということ—』ミネルヴァ書房
- 伊藤香織 [2019] 「シビックプライドを醸成する都市環境」『理大 科学フォーラム』2019(10)
- 伊藤香織+紫牟田伸子監修、シビックプライド研究会編 [2012] 『シビックプライド—都市のコミュニケーションをデザインする』宣伝会議
- [2015] 『シビックプライド2『国内編』—都市と市民のかかわりをデザインする』宣伝会議
- 伊藤裕夫 [2008] 「地域文化資源と文化マネジメント—富山の事例からの考察—」[井口編 2008：53-68] 所収

- 犬飼公之 [2004] 『琉球組踊玉城朝薫の世界』 瑞木書房
- 伊波普猷・東恩納寛惇・横山重編 [1962] 『琉球史料叢書 第一』 井上書房
- 伊波普猷 [1924] 『琉球文学研究』 青山書店
- 伊波普猷 [2017] 「阿麻和利考」伊波普猷『古琉球』第9刷、岩波書店、所収
- 岩井千華 [2022] 「地域の矜持を蘇らせる地域文化資源再発見の集いに関する考察～北海道美唄市南美唄町『南美緑会』を事例として～」『公共コミュニケーション研究』第7巻第1号
- 上江洲安吉+『きむたかの翼』編集委員会 [2011] 『きむたかの翼—沖繩の中高生の舞台「肝高の阿麻和利」構想からの軌跡—』長崎出版
- 嘉藤笑子 [2013] 「地域社会に関わる文化芸術の可能性」『文化資源学』11 文化資源学会
- 川井田祥子 [2013] 「文化的景観を活かした地域再生の試み—兵庫県篠山市における取り組みから—」『文化政策研究』第7号
- 川平朝申 [1982] 「勝連按司阿摩和利の名誉のために」『沖繩文化研究』9 法政大学沖繩文化研究所編
- 菊地暁 [2019] 「オープンであること/デジタルになること」『日本民俗学』300号
- 菊地淑人 [2013] 「文化財の価値調査から文化資源保護・活用への広がりと将来の模索—京都岡崎における近代の記憶の発掘・継承とその資源化」『文化資源学』11 文化資源学会
- 木下直之 [2013] 「地域社会と文化資源」『文化資源学』11 文化資源学会
- 木下直之 [2017] 「学会創設前夜」『文化資源学』15 文化資源学会
- 球陽研究会編 [1974] 『球陽 読み下し編』角川書店
- 公益財団法人日本都市センター [2019] 『住民がつくる「おしゃれなまち」—近郊都市におけるシビックプライドの醸成—』公益財団法人日本都市センター
- 小泉凡 [2013] 「文化資源として生かす小泉八雲—松江における3つの実践から」『文化資源学』11 文化資源学会
- 小島桃子・片田江由佳 [2015] 「シビックプライド研究会活動記録」[伊藤+紫牟田：2015] 所収
- 小林真理 [2013] 「地域社会で文化資源が活用されるための環境整備」『文化資源学』第11号、文化資源学会編
- [2020] 「文化資源」小林真理編『文化政策の現在1 文化政策の思想』第2刷 東京大学出版会
- 小村弘 [2022] 「歴史・文化資源を有する市街地における再構築について—ならまち、松江市及び金沢市の老舗による場の創出を中心として—」『日本観光学会誌』第63号
- 佐藤仁編 [2008] 『資源を見る眼—現場からの分配論』東信堂
- 敷田麻実 [2009] 「よそ者と地域づくりにおけるその役割にかんする研究」『観光学ジャーナル』9
- 滋野浩毅 [2007] 「都市の創造性に依拠したまちづくり主体の研究—楽洛まちぶらの会の成立・発展過程を事例に—」『文化政策研究』第1号
- 嶋津与志 [2011] 『「肝高の阿麻和利」誕生秘話」[上江洲安吉+『きむたかの翼』編集委員会：2011] 所収
- 白井克也 [2022a] 「46 中国銭6枚 開元通宝・天聖元宝・大観通宝・洪武通宝」東京国立博物館・九州国立博物館・NHK・NHK プロモーション・読売新聞社編『沖繩復帰50周年記念 特別展 琉球』図録
- 白井克也 [2022b] 「47 ローマ帝国貨幣・オスマン帝国貨幣10枚」東京国立博物館・九州国立博物館・NHK・NHK プロモーション・読売新聞社編『沖繩復帰50周年記念 特別展 琉球』図録



- 末永航 [2013]「尾道の文化資源と市民活動」『文化資源学』11 文化資源学会
- 竹口弘晃 [2013]「地域の文化的資源の顕在化に関する研究—「文化の資源化」と「コンテキスト転換」による価値発現の視点から—」『文化政策研究』第7号  
—[2014]「地域の文化資源をめぐる社会的実践の理論構築に向けた予備的考察」『文化政策研究』第8号
- 田島随庵 [1924]「阿摩和利加那といへる名義」[伊波編：1924] 所収
- 立山博邦 [2017]「文化の資源化にみられる政治性—パプアニューギニアのナショナル・マスク・フェスティバルを事例として—」三好皓一編『地域資源とコミュニティ・デザイン』晃洋書房、所収
- 田原真孝 [2011]「教育委員会にとって前例のない演劇事業。『無駄では?』と思いつつも前進するしかなかった」[上江洲安吉+『きむたかの翼』編集委員会：2011] 所収
- 土屋正臣 [2013]「地域文化の担い手と市民参加型発掘調査—野尻湖発掘の今日的意義」『文化資源学』11 文化資源学会
- 鶴見和子 [1996]『内発的發展論の展開』筑摩書房
- 東門弘 [2011]『「肝高の阿麻和利」は突如うまれたものではありません」[上江洲安吉+『きむたかの翼』編集委員会：2011] 所収
- 富本真理子 [2009]「地域資源の活用による観光まちづくりに関する考察—地域資源活用モデルを使って—」『文化政策研究』第3号  
—[2014]「地域文化振興に『まち歩き』が果たす役割—『まいまい京都』を事例として—」『文化政策研究』第8号
- 富本真理子・織田直文 [2007]「まちづくりに貢献しうる地域博物館に関する事例研究」『文化政策研究』第1号
- 西形達明 [2017]「歴史的建造物の保存と活用—朝来市竹田城を例として—」橋本行史編著『地方創生—これから何をなすべきか—』創成社
- 根木昭 [2001]『日本の文化政策—「文化政策学」の構築に向けて—』勁草書房
- 根木昭 [2010]『文化政策学入門』水曜社
- 根木昭・佐藤良子 [2016]『文化政策学要説』悠光堂
- 芳賀久雄 [2013]「地域の文化資源を市民共有の財産として生かすための実践活動」『文化資源学』第11号、文化資源学会編
- 林直保子 [2021]「地域文化資源の鑑賞が地域の人々への愛着と信頼に及ぼす影響： 地域文化資源としての大坂画壇に焦点を当てて」『社会的信頼研究』第2巻
- 平田オリザ・平田大一・本橋哲也 [2002]「対談『臨界点の演劇』と地域共同体—『豊岡演劇祭』と『現代版組踊』—」『演劇学論集 日本演劇学会紀要』74
- 藤原恵洋 [2013]「文化資源から導く『文脈』『矜持』『紐帯』の再生を軸とした地域づくり—熊本県菊池市における菊池文化資源総合調査を通して」『文化資源学』第11号、文化資源学会編
- 干場辰夫 [2017]「文化政策における『文化』概念の問題」『文化政策研究』第11号
- 牧瀬稔 [2019]「日本における『シビックプライド』の動向整理」『公共政策志林』7
- 松隈章 [2013]「愛着が生む地域力—『塩屋』と言う文化資源」『文化資源学』11 文化資源学会
- 松下啓一 [2021]『市民がつくる、わがまちの誇り—シビック・プライド政策の理論と実際』水曜社
- 三浦伸也 [2013]「南三陸町でのアートプロジェクトの広がり地域との記憶の記録—『きりこ』プロジェクトをとおして考える地域の『想像』と『創造』」『文化資源学』11 文化資源学会

- 光多長温 [2009] 「地域資源活用による地域づくり」藤井正・光多長温・小野達也・家中編著『地域政策入門—未来に向けた地域づくり—』第2刷 ミネルヴァ書房、所収
- 名桜大学『琉球文学大系』編集刊行委員会編纂、波照間永吉校注 [2023] 『琉球文学大系2 おもろさうし 下』ゆまに書房
- 名桜大学『琉球文学大系』編集刊行委員会編纂、波照間永吉・鈴木耕太・西岡敏・大城學校注 [2022] 『琉球文学大系14 組踊 上』ゆまに書房
- 山田均 [2020] 「シビックプライドを醸成することの可能性について」『奈良学園大学紀要』第12集
- 山下晋司編 [2007] 『資源化する文化』弘文堂
- 渡部薫 [2021] 「地域づくりの方法としてのシビックプライド—その可能性と政策的関与のあり方についての検討—」『Kumamoto Law Review』 vol.152